

倭馬飼とその牧

鷺 森 浩 幸

はじめに

五世紀頃に倭国に馬がもたらされ、馬の飼養および利用が始まった。これは考古学的にも確認される事実である。当初、馬の飼養に当たったのは倭（大和）・河内の馬飼たちであった。いくつかの史料に倭馬飼・河内馬飼がみえるが、その実態はさほど明瞭ではない。彼らが大和・河内において馬を飼養し、王権による馬の利用を支えたことはまちがいない、おそらく当時の馬飼養の中心となる集団であったと考えられる。

井上光貞^①は馬飼部をいわゆる職業部のひとつに分類し、倭・河内の馬飼にふれ、各地の伴造（馬飼造）を統轄する上級の存在がみあたらず、馬司ともいうべきひとつの官司に属したと指摘した。平野邦雄^②は、職業部などの部民制と、五世後半に渡来した、漢人系の百濟才伎の間にはきわめて緊密な脈絡があり、おおむね職業部は東西漢氏の配下にあったと指摘した。これは平野の部民論の核心をなす論点のひとつである。馬飼のケースにもふれ、八世紀の雑

戸解放の時に鍛冶・造兵司の雑工戸と同一に扱われたことや、西文氏の一族に馬史が存在すること、反新羅的行動がめだつことなどから、百濟系の集団で、東西漢氏の配下にあったと推定した。ただし、馬飼の史料上の初見は五世紀後半より前で、渡来後、一定の期間の後、東西漢氏に属するようになったとした。また、説話的な色彩が濃い『日本書紀』応神一五年八月六日条の百濟王から献上された良馬を阿直伎に飼養させたとする物語や雄略九年七月一日条の田辺伯孫の馬と土馬を交換した物語も、東西漢氏や渡来系氏族と馬の関係を示す史料として注目されてきた。

以上の研究は部民制の成立やその特質を究明しようとしたもので、必ずしも、当時の大和・河内の具体的な社会状況に即して論じたものではなかったと思われる。詳細は以下に示すが、その後、大和・河内の馬の飼養や牧、それに関わる氏族などの研究が進展し、新たな論点が提起されていった。そのような研究では、逆に職業部としての倭・河内馬飼にあまり注意が払われなかったように思われる。倭・河内馬飼が存在したのは事実であるが、そのありさまや歴史的性格が明らかになったとはいいがたい。本稿は、改めて、この馬飼集団のうち、倭馬飼に焦点をあて、具体的なあり方を説明しようとするものである。

一 室原馬飼とその牧

いわゆる二条大路木簡のなかに次のようなものがある。二条大路上の北寄りに掘られた廃棄土坑であるSD五三〇〇からの出土である(『平城宮発掘調査出土木簡概報』二四 八ページ下)。

・「」

天平八年八月五日正八位下少属室原馬養造「田主」

368・(19)・3081

これは、文書木簡であることは明確であるが、具体的な授受の関係、用件・内容などはまったく不明である。裏面はもちろん日付・署名である。少属は職・寮および東宮坊などの第四等官である。左右馬寮の少属である可能性もかなりあると思われるが、官司名を確定することはできない。『日本書紀』白雉四(六五三)年五月一二日条には室原首御田の人名がみえる。こちらは氏に「馬飼」の名称がなく、また、姓も異なるが、後に造を賜姓されたとも考えられ、室原馬養造と同一の氏である可能性もあると思われる。天平一四(七四二)年二月一七日優婆塞貢進解(『大日古』二・三二八)^⑧は大倭国城下郡司が国符を受けて、国分寺僧の候補として優婆塞を貢進した文書であるが、署名者は大領外正八位下大養徳連友足と権少領大初位上室原造具足の二人である。室原造具足はやはり姓の共通する室原馬飼氏ではなかったかと思われる。少なくとも彼が城下

郡内の有力豪族であったことがわかる。

『和名抄』大和国城下郡に室原郷があり、室原馬飼氏はここに居住した可能性がある^⑨。室原の所在地について考察する。『和名抄』によると、大和国城下郡には賀美・大和(於保夜未止)・三宅(美也介)・鏡作(加加都久利)・黒田(久留多)・室原の六郷が存在した(かつこ内は訓注)。室原郷には「他本也」(高山寺本)、「也本也」(東急本)の注記があり、室也(むろや)郷であったとも考えられる^⑩。「むろや」であれば、現在、村屋神社の存在する田原本町蔵堂付近に比定することができる。しかし、上記のように奈良時代およびそれ以前の史料で室原の名称が確認できる以上、室原郷のままで解釈すべきであると思われる。『大和志』や『大日本地名辞書』は現田原本町唐古付近に比定するが、確証のある比定ではないようである。

城下郡において、室原郷および賀美郷の所在地は未詳であるが、大和・三宅・鏡作・黒田郷の所在地は比較的明確である。以下、概略を述べる。

大和郷は大和神社の存在が鍵となる。現在、大和神社は天理市新泉町に存在するが、これは本来の所在地ではない。『日本書紀』垂仁二五年三月一〇日条によると、「大倭大神」は「大市長岡岬」に祭られており、また、『延喜式』神名上によると、大和神社は山辺郡に存在した。現所在地は城上郡である。長岡岬は現在、長岳寺の

存在する丘陵地域に比定するのが穏当であり、「長岳」¹¹「ながおか」であろう。したがって、城下郡大和郷は長岳寺の西方の、山辺郡との境界付近に求めることが可能であろう。服部昌之¹²の指摘するように、両郡の界は下つ道と考えられ、その西側になる。三宅郷は倭屯田に由来すると仮定すると、城下郡の南東隅あたりになる。天平二年大倭国正税帳(『大日古』一・三九六)から、城下・十市郡に倭屯田があったことが判明する。岸俊男¹³の指摘のように、倭屯田は城下・城上・十市郡の境界付近に求めるべきであり、後の興福寺領出雲荘(現桜井市江包、大西、大泉)周辺がその所在地であったと考えられる。出雲荘自体は城上郡に属したと思われるが、城下郡の三宅郷は城上郡との境界(中つ道)および十市郡との境界(路東条里の一九条北端から一町南)付近に比定することが可能である。なお、現在の村屋神社の所在地はこの三宅郷に含まれる可能性があり、この点からも、室原を室也(むろや)とするのは妥当性を欠くといわざるをえない。

黒田郷および鏡作郷は現在の地名から容易に現地比定が可能である。黒田郷は現田原本町黒田であり、この地は孝靈天皇の廬戸宮の伝承地である。鏡作郷は『延喜式』にみえる鏡作坐天照御魂神社・鏡作伊多神社・鏡作麻気神社の所在地から推定可能である。それぞれ田原本町八尾・保津・小阪に存在し、おおむねこの周辺を鏡作郷とみることができよう。

倭馬飼とその牧



図1 佐保川・初瀬川の合流地点付近の歴史的環境

この四郷は城下郡の南半に存在し、初瀬川(大和川)・寺川・飛鳥川などが合流する北半の地域が人々の生活空間になっていなかったことが推定できる。賀美郷の所在地は不明であるが、城下郡内の上(かみ)に存在し、それがさらに城(しき)の上・下とも対応すると考えると、やはり城下郡の南部に求めることが可能であろう。主として畿内の牧が川に隣接する低湿地や中州などに存在したことを考慮すると、馬飼の居住した室原郷は北半の川沿いの地域に存在した可能性があると考えられるが、ほかの郷の所在地と基本的に重なることはなく、そのように推測する余地は充分にあるといえよう。

次に地形や地名をはじめとするさまざまな要素をもとに、室原馬飼

氏の居住地を推定してみたい(図1参照)。初瀬川と北から流れてくる佐保川の合流地点の東側には馬とのつながりを想起させるものが集中的に存在する。以下に示す諸先学によるさまざまな議論のあるところであるが、改めて論じる。まず、額田部川田連・額田部湯坐連の存在である。『新撰姓氏録』に次のようにある。

左京神別天孫 額田部湯坐連

天津彦根命子明立天御影命之後也。允恭天皇御世 被_レ遣_二薩

摩国_一平_二隼人_一。復奏之日 献_二御馬一匹_一。額有_二町形廻毛

一。天皇嘉之。賜_二姓額田部_一也。

大和国神別天孫 額田部河田連

同神(天津彦根命)三世孫意富伊我都命之後也。允恭天皇御世

献_二額田馬_一。天皇勅 此馬額如_二田町_一。乃賜_二姓額田連_一也。

額田部川田連は允恭天皇期に「額田馬」を献じたので、額田部連と賜姓され、額田部湯坐連も允恭期に薩摩に遣わされて、隼人を平定し、馬を献じたので額田部と賜姓されたとの伝承をもつ。額田部連に関しては後述するが、額田の馬に関係する伝承である。額田部川田連は現天理市嘉幡に居住したと思われる氏族である。さらに、『日本書紀』仁賢六年是歳条には「日鷹吉士還_レ自_二高麗_一 献_二工匠須流积・奴流积等_一。今倭国山辺郡額田邑熟皮高麗 是其後也」と、熟皮高麗の渡来記事がある。熟皮とは皮革の加工(技術者)のことであり、彼らは高句麗から献上された工匠であった。彼らの職掌は

馬の飼養や利用と結びつくものと考えられる。もちろん、「倭国山辺郡」の表記は当時のものではなく、令制に基づくが、額田の地名が山辺郡域まで伸びていたことを示唆する。前述のように、額田を含む平群郡と山辺郡の境界は下つ道であり、熟皮高麗が居住したのは下つ道に東隣する地域であっただろう。

現在、大和郡山市に馬司町の地名が残る。この地名は中世までさかのぼり、近世には五〇〇石程度の村(馬司村 松笠と表記されることもあったようである)として存在した。また、馬司町の東南、嘉幡の北には荒蒔の地名が残る(天理市荒蒔町)。この地名も中世にさかのぼり、江戸時代には四〇〇石程度の村として存続した(荒蒔村 荒巻とも表記された)。「まき」は牧の意の可能性もあると思われる。この地には、古墳時代後期(六世紀前半)に築造された全長約三〇メートルの前方後円墳が存在し、発掘調査で埋没した周濠の痕跡が発見され、円筒埴輪や形象埴輪が出土し、そのなかに馬形埴輪三点が含まれていた^⑧。また、笹鉾山(田原本町八尾)は六世紀前半に築造された、直径約二二メートルの前方後円墳で、墳丘は残っていないが、発掘調査で周溝が確認された。周溝の堆積層上層で円筒埴輪、朝顔形埴輪や形象埴輪が出土し、人物埴輪や馬形埴輪が含まれていた。馬と人物は馬とそれを曳く人のセットになると思われ、貴重な事例である^⑨。

下永東方遺跡(川西町下永)は嘉幡町の東、馬司町や荒蒔古墳の

南で、初瀬川の北岸に接する地点に立地する。弥生時代からの遺跡であるが、古墳時代後期の溝（SD二〇〇）と柵（SA〇一）が検出されたことは注目される。溝は最大幅一・二メートル程度の東西方向の溝で、二三メートル分が検出され、六世紀後半のものと考えられる。その北側に柵が付属する。三個の柱穴が検出され、延長は七メートルに達する。SD二〇〇と同時期のものと推定されている^⑩。この溝や柵の性格や用途は不明のようであるが、牧の防護柵のような馬の飼養のための設備を想定することが可能かもしれない。現在、下永地区は初瀬川の南北に広がるが、江戸時代にはもと一村であったものが、下永村と南下永村の分離していた。下永村の北限（同時に現在の川西町の北限および平群郡と城下郡界）はかつての大和川の流路を示しているのではないかと思われる。したがって、もとは下永の地区は大和川の南の城下郡域に属したと思われる。

以上のように、北から流れる佐保川と南から流れる初瀬川が合流する地点の東側、すなわち、額田部丘陵の東方の平坦地周辺には、馬と関わる、さまざまな要素を見いだすことができ、牧が存在した可能性を十分に想定することが可能である。先に推定した室原郷の所在もあわせて考えると、この地に室原馬飼氏が居住し、その周辺には牧が広がっていたとの推定に到達する。

室原馬飼氏はどのような性格を持つ馬飼集団であっただろうか。

倭馬飼とその牧

つまり、大和王権の馬の飼養・利用の体制のなかでどのように位置づけることが可能であろうか。大和王権の馬の飼養を中心となって支えたのは、最初に述べたように、倭馬飼および河内馬飼の二か所の馬飼集団であるが、河内馬飼は河内母樹馬飼首・沙羅々馬飼造・菟野馬飼造といった地名を冠する馬飼の諸集団から構成されたと考えられる。同様に、大和の地名を冠する室原馬飼造（あるいは首）が倭馬飼氏を構成する馬飼であった可能性は大いにあると思われる。森公章^⑪は倭馬飼と関わって室原馬飼の存在に言及するが、判断を保留した。笹川尚紀^⑫は倭馬飼や室原馬飼が律令制下の左右馬寮馬部の負名氏に該当するとの推測を示したが、詳細な議論はない。

ここで注目したいのはまず、前掲の熟皮高麗である。彼らは律令制下の大藏省所属の品部である狛戸に相当するものと考えられる。

職員令33大藏省条には「典革一人^字 雜革染作・檢校狛部 狛部六人^字 雜革

染作（略）百濟戸 狛戸」とあり、『令集解』同条所引の官員令別記

には「忍海戸狛人五戸・竹志戸狛人七戸 合十二戸。役日无^レ限。

但年料牛皮廿張以下令^レ作。村々狛人三十戸・宮郡狛人十四戸・大

狛染六戸。右五色人等為^三品部^一 免^三調役^一也。紀伊国在狛人・百

濟人・新羅人并卅人戸。年料牛皮十張 鹿皮麩皮令^レ作。取調庸

一免^三雜徭^一とある。狛戸には忍海戸狛人・竹志戸狛人・宮郡狛

人、居住地の記されない村々狛人、大狛染、紀伊国の狛人があった

ようであるが、額田邑のものは村々狍人に相当するとみることができ。主に牛皮・鹿皮を作ったようであり、馬皮の記載はない。このような律令制下の品部は部民制下の職業部の系譜を引くと考えられ、熟皮高麗はもともと職業部に編成され、大王に奉仕したと思われる。

『新撰姓氏録』左京神別・大和国神別天孫によると、奄智造は額田部川田連と同じく天津彦根命の後裔である。『古事記』でも天津日子根命の後裔として倭淹知造がみえる。奄智の地名が現在の嘉幡の西方の天理市庵治町にあたることはまちがいない。二条大路木簡のなかに奄智園からの薑の進上木簡があり^⑬、天平勝宝二(七五〇)年二月二十四日官奴司解(『大日古』三・三五九)には官奴婢が置かれた奄知村がみえ、『日本霊異記』中三三女人悪鬼見^⑭点^⑮倭^⑯三食噉^⑰縁にも十市郡菴知村の東方の富豪である鏡作造の物語がみえる。石上英一^⑱がすでに、官奴司解にみえる村々が王家と密接につながる地域であることを指摘した。石上は奄知村について、明確に王家との関係をうかがわせる史料はなかったとするが、この村のみが例外であるはずはない。奄智園の性格も明確に示すことはできないが、二条大路木簡が天皇家の日常生活と密接に関わる木簡群であることに疑いの余地はない。平林章仁^⑲は『日本書紀』雄略二三年是歳条の、筑紫安致臣・馬飼臣が高句麗に派遣された記事から、筑紫安致臣は筑紫に移動した奄智氏であり、奄智氏は馬匹集

団であったことを推定した。ただし、関係史料から直接的に論証できるとこの地の状況は園が立地したことのみである。

園が存在し、職業部や官奴婢が居住したとすると、それは天皇に直接奉仕する、供御所領がこの周辺に展開したことがかなりの確実性をもって推定可能である。さらに、ここに供御の牧が存在し、それを管理したのが室原馬飼氏であったと考えることは自然であろう。したがって、室原馬飼氏とは供御の牧を管理し、馬の飼育に従事する集団なのであり、それは倭馬飼にほかならず、河内馬飼の事例と同じく、倭馬飼にもそれを構成するいくつかの集団があり、室原馬飼氏はそのうちのひとつであったと考えることができる。

二 平群氏と額田の馬

ここまで、額田部丘陵の東に接する牧の存在を指摘し、それが倭馬飼を構成する一集団である室原馬飼の管理下の、天皇家の供御の牧であったことを論じてきた。このような見解は額田部丘陵周辺における馬の飼養などに関する、従来の研究とは異なり、また、くいちがう点もある。以下、研究史を追いながら、額田における馬の飼養について私見を明らかにしていきたい。

まず、平群氏について。平群氏は大和西部の平群谷を本拠とする、武内宿祢後裔氏族のひとつである。生駒山地の東西の山麓は馬と関わりの深い地域であり、平群氏による馬の飼養が注目されて

きた。『古事記』孝元によると、武内宿祢の子平群都久宿祢は平群臣・佐和良臣・馬御織連の祖であり、馬御織連は『新撰姓氏録』大和国皇別に平群氏と同祖とみえる馬工連と同じと考えられる。平群氏の一族に馬の飼養に携わる氏があったことは確実である。さらに、『日本書紀』武烈即位前紀には、平群真鳥・鮪の説話がある。

それはつぎのようなものである。仁賢天皇が死去した後、大臣平群真鳥が国政を専擅した。太子（後の武烈）は物部鹿鹿火の女影媛を聘するために、媒人を遣わしたが、影媛は真鳥の男鮪に姦され、海柘榴市の巷で待つと答えた。太子は海柘榴市に向かうため、真鳥に官馬を求めたが、結局、真鳥は応じなかった。太子は歌垣の場で、鮪との歌のやりとりをするなかで鮪が影媛を得たことを知り、鮪、そして真鳥を殺害した。説話的な要素が強いが、平群真鳥が官馬を管理したことが描かれる。

これらの点が平群氏と馬のつながりを証するものとして論じられてきた。さらに中心的に論じられてきたのが『紀氏家牒』逸文である。田中卓が¹⁶⁾この史料を紹介し、それを利用して平群氏について論を展開し、以後の研究の出発点となった。田中が用いたのは次の三点の逸文である。

(1) 家^二大倭国平群県平群里^一。故称曰^三平群木兔宿祢^一。是平群朝臣・馬工連等祖也。

(2) 又云、額田早良宿祢男 額田駒宿祢 平群県在^三馬牧^一

択^二駿駒^一養之。献^三天皇^一。勅賜^二姓馬工連^一 令^レ掌^レ飼。

故号^二其養^レ駒之^一 曰^三生駒^一 又云、額田駒宿祢男 馬工御織連

(3) 平群真鳥大臣弟 額田早良宿祢 家^二平群県額田里^一。不^レ

尋^二父氏^一 負^二姓額田首^一

まず、田中は(3)から、真鳥の弟に額田早良宿祢があり、その後裔が額田首と早良首であったこと、(2)から、額田早良宿祢の子額田駒宿祢が馬の飼育に従事し、天皇に馬を献上し、馬工連を賜姓されたことを読み取り、平群氏系の額田首が平群郡額田郷で馬の飼育に従事したと結論した。本位田菊士¹⁷⁾は平群真鳥の説話や『紀氏家牒』から、平群氏と馬の関わりを論じ、同氏が大和王権の騎兵隊編成に関与し馬具・馬装の技術に結びついた軍事氏族であったとした。ただし、大和の額田との関係には言及がない。加藤謙吉¹⁸⁾は『紀氏家牒』から、馬工氏と牧とのつながりを指摘して額田部連や額田部川田連とともに馬の飼養にあたったこと、額田首の本拠を河内の額田として母姓によったとの記載は平群氏の系譜に結びつくための作為であったこと、大和・河内の額田の間に交流があり、平群氏の勢力が両方に深く浸透していたことを推測した。辰巳和弘¹⁹⁾は『紀氏家牒』から、天津彦根命の後裔とされる額田部川田連・額田部湯坐連だけでなく、馬工連や平群氏から分枝した額田宿祢（額田首）が額田地域の馬に関わったことを論じ、額田部連が伴造で、その配下で、額田部川田連・額田部湯坐連・額田首が実際に牧の経営や馬

の生産にあたったと全体的な体制を推定した。近年では、森公章²⁰が、平群氏につながる額田首について、(1)(2)から平群氏の一族が生駒山東麓の馬牧を管理し、彼らが西麓の馬牧周辺に居住する氏族と通婚することは想定可能であると示した。仁藤敦史²¹は『紀氏家牒』により、平群氏系の額田首氏が天皇への馬献上の説話を持つことを指摘し、天津彦根系統の額田部氏が同じく馬の飼育・献上についての起源伝承を有したとあわせて、大和・河内の馬飼が平群氏を媒介にして民族的にも職掌的にも一体のものとして機能したと結論した。なお、森・仁藤には平群氏と大和の額田との結びつきについて、詳細な議論はない。笹川尚紀²²も、『紀氏家牒』から馬御織氏が大和の額田での馬の飼養に関係したことを承認した。また、「□□□□(大倭国平力)群郡中郷牧野里」と記された木簡(二条大路木簡 『平城宮発掘調査出土木簡概報』三一 二三―ベージ上)から平群谷にも馬牧が設けられており、平群氏による馬の飼養を示すとした。平林章仁や渡里恒信も²³、平群氏と馬の結びつきを論じるなかで、『紀氏家牒』から、平群氏系の氏族が大倭国平群郡額田郷に本拠を有したとした。平群氏と馬の関係を論じる際に、馬御織連や平群真鳥説話に加えて、『紀氏家牒』が取り上げられ、特に『紀氏家牒』の記載が具体的な考察の素材とされてきたことがわかる。

改めて『紀氏家牒』の記載を検討してみる。(1)が平群木兔宿祢が

平群朝臣・馬工連の祖であるとする『新撰姓氏録』の記事などに基づくことはまちがいない。かろうじて独自の記述といえるのが、木兔宿祢が平群県平群里に居住したとする点であるが、これも氏名からの推測にすぎないのかもしれない。(2)は生駒の地名起源説話ともいうべきもので、ここに見える平群県の馬牧は生駒周辺に存在したと考えなければならぬ。これは今問題としている大和の額田に存在したのではない。(3)が『新撰姓氏録』の額田首の記載「早良臣同祖 平群木兔宿祢之後也。不_レ尋_二父氏_一 負_二母氏額田首_一」と共通することは明白である。真鳥の弟額田早良宿祢および、(2)から読み取れるその子額田駒宿祢の系譜は注目される。また、額田早良宿祢が平群県額田里に居住したとされる点が、平群氏と大和の額田を結びつける大きな根拠である。しかし、額田早良宿祢・額田駒宿祢の系譜や額田早良宿祢の大和の額田での居住の記載は『新撰姓氏録』にはなく、また、『新撰姓氏録』では額田首は河内国皇別に記載があり、河内国河内郡額田郷に居住した氏族と考えられる。(3)が『新撰姓氏録』の額田首の記載をもとにして創作された、信頼性の低いものである可能性は残るのではないだろうか。印象論になってしまいが、早良の名は平群氏の同族の佐和良臣からの連想であろうし、駒の名はまさしく馬の意味である。なお、辰巳は額田早良宿祢のような名から額田宿祢氏の存在を想定したが、他の史料で確認することはできず、宿祢は単なる尊称なのであらうと思われる。

(1) (2)に示されたように、平群氏が、本拠である平群谷（平群県平群里）や生駒山周辺で馬の生産を行ったことは馬御織連の存在や牧野里の地名から首肯でき、森も認めるように、その結果、おそらく河内馬飼の一集団である額田首との婚姻関係が生じ、母の氏に従い額田首となった者があったことも、『新撰姓氏録』からみて、事実であろう。河内の額田は生駒山の東麓であり、生駒谷・平群谷とも近い。しかし、平群氏が大和の額田における馬の飼養に関与したとするのは慎重でなければならず、平群真鳥が官馬を管理したとするのも歴史的事実ではなく、説話の誇張であろうと考えられる。また、従来から指摘のあるように、『古事記』ではこの説話は顕宗天皇と平群鮪の物語であり、関わる天皇が異なり、なによりも真鳥が登場しない。

三 額田部と馬

額田部と馬の関係²⁴は前述の額田部川田連や額田部湯坐連の伝承などから明白である。推古天皇期における額田部連比羅夫の行動もその証左である。以下の通りである。

『日本書紀』推古一六年八月三日条²⁵

唐客入¹京。是日遣²飾騎七十五匹¹而迎³唐客於海石榴市¹術¹。額田部連比羅夫以告²礼辞¹焉。

『日本書紀』推古一八年一〇月八日条

倭馬飼とその牧

命¹額田部連比羅夫¹為²下迎³新羅客¹莊馬之長^上。以³膳臣大伴¹為²下迎³任那客¹莊馬之長^上。即安³置阿斗河辺館¹。

『日本書紀』推古一九年五月五日条

葉¹獵於菟田野¹。取²鷄鳴時¹集³于藤原池上¹。以³公明¹乃往²之。粟田細目臣為²前部領¹。額田部比羅夫連為²後部領¹。

現在でも、額田部の性格について議論があり、共通認識があるとはいいがたい。その議論と密接に関わりながら、額田部氏と馬の関係も論じられてきた。基本的に額田部を名代・子代と理解する見解（以下、名代説）、田部の一種と理解する見解（以下、田部説）がある。

名代説は吉田晶・狩野久・岸俊男が主張し²⁶、最近では森公章がその説をとった。狩野の見解がもっとも詳細であろうと思われる。狩野は額田部宿祢のような宿祢姓氏族には、いわゆる門号氏族・名代の上級伴造・職業部の伴造が多いこと、複姓の湯坐連が存在すること、推古天皇の幼名は額田部皇女であり、この名は乳母の氏名が額田部連か名代額田部の伝領を媒介にして生まれたと考えられることを根拠に名代説を展開した。いっぽう、田部説は本位田菊士²⁷の見解が詳細で、近年の仁藤敦史のそれ²⁸がある。本位田は額田部が湯坐とつながったとしても、本来の職務とは別であり、複姓の湯坐連は額田部宿祢氏と系譜が異なり、その存在は二次的な職掌を示すとし、額田部は太田部・若田部と近く、断定できないまで

も近親関係は認められるとの結論を示した。仁藤はさらに、『新撰姓氏録』河内国神別天孫の額田部湯坐連が天津彦根命の五世孫「乎田部連」の後裔とされることに注目した。本位田は田部説をとり、そこから発展させて、境界祭祀への関与を媒介として、馬の飼養や儀礼における呪術の役割を指摘した。つまり、額田とは山間と里の境界部分の開墾田で、境界祭祀と関わるようになり、さらに飾馬の祭祀呪術的な意義を参照して、馬の調達などに従事したとの見通しを示した。そのなかで、額田部氏が河内馬飼の上級伴造であったと推測した。前田晴人や平林章仁²⁸⁾は、額田部の全体について明確な判断は保留したようにもみえるが、前田は三野県主と同族の明日名門命系の額田部連（宿祢）は河内国河内郡額田郷または高安郡額田里を本拠とし、馬を天皇に献上することを職とする氏族であったとし、平林は額田部連氏は早くから平群氏や同族の早良氏と馬匹集団として連携して行動し、本来、倭馬飼として編成されていたとした³⁰⁾。

田部説では、額田部の田部としての性格や歴史的な意義が未解明であると思われる。すなわち、額田部はどのような田部であって、部民の一種である田部のなかでどのように位置づけることができるのであろうか。この点について明確な結論が示されていないように思われる。また、本位田は、上述のように、境界祭祀や馬の飼養の問題を取り上げたが、田部である額田部がこのように大きく職務を

拡大していくことがありえたのであろうか。部（あるいは伴）とは、特定の職掌を世襲し、それをもって王権に奉仕するものであるはずである。額田部が馬と関わったことは事実であるが、そのような位置づけをする、倭・河内馬飼とどのような関係にあったのであろうか。平林の見解や、律令体制下の馬部の負名氏に額田部連を想定する佐伯有清の見解もある³¹⁾が、確証はない。額田部は、森公章が詳細に論じたように、おそらく大和の額田に存在した宮に、奉仕する名代であったとみるのが妥当であると考えられる。そして、推古天皇の幼名額田部皇女は彼女が額田の宮と関わりをもち、額田部の奉仕を受けたことによると思われる。ただし、額田部氏と馬との関係は濃厚であり、この点を包摂する議論にしなければならない。

森公章が額田部比羅夫の活躍について、推古即位という主人の地位上昇にともって、それに奉仕する人々も王権内での任務に関与するという構図に基づくのではないかと推定した。やはり、比羅夫の行動が推古期にのみみえるのは看過できない。もちろん、比羅夫の年令や生存期間の問題もからむが、それは不明とせざるをえない。額田の宮と、それに隣接する供御の牧、名代としての額田部、倭馬飼（室原馬飼）を組み合わせて考察すると、次のような仮説を立てることが可能であろう。推古即位以前では、倭馬飼は供御の馬を飼養して王権に奉仕し、いっぽう、額田部は額田の宮を領有する額田

部皇女に奉仕した。推古が即位すると、両者の奉仕の対象が重なることになり、しかも、宮と牧は隣接していた。この結果、額田部氏が供御の馬の飼養や利用に関与するにいたり、額田部比羅夫のようなケースがあらわれた。おそらく額田馬の伝承が額田部川田連や額田部湯坐連に取り込まれたのもこの頃であろう。従来から指摘のある通り、この伝承は額田の地名やそこで飼養される馬の起源をものがたり、河田や湯坐の起源とは関係がない。また、この二氏は天津彦根命の後裔で、額田部の中核を形成すると思われる明日名門命の後裔の諸氏とは異なる。このように、額田部が馬と密接に関わるのは推古期に特有の現象なのであり、額田部自身の古くからの性格でも、それを職務としたわけでもないと考えられる。したがって、推古の死去後には、このようなあり方ではなくなったと思われるが、部民制の廃止は目前であった。

おわりに

大和における牧の所在、馬の飼養や馬飼集団などについて議論を進めてきた。結論を簡単に要約すると、次のようになる。

- (1) 供御の馬を供給する倭馬飼の、おそらく中心的な集団のひとつが室原馬飼で、彼らは額田部丘陵東方の、佐保川・初瀬川の合流地点周辺に牧を持ち、その近くに居住した（後の城下郡室原郷）。そこで飼養され、貢上されたのが額田馬

であった。

- (2) 平群氏は平群谷で馬の飼養を行い、河内馬飼を構成する額田首と婚姻関係を持つなどし、この付近は大和における馬の飼養地のひとつであった。ただし、平群氏は大和の額田における大和王権の馬の飼養とは関係がなかったと思われる。

- (3) 額田部は大和の額田の宮に奉仕する名代であったが、推古天皇（額田部皇女）の即位にともない、隣接する牧の供御の馬にも関わりを持つようになった。額田部比羅夫が飾馬を率いたことの背景にはそれがあった。額田部川田連や額田部湯坐連が額田馬の伝承を持つようになったのもそのためである。したがって、額田部の馬との関係はこの時期に限定された現象と推定される。

以上である。奈良盆地の中央に位置する立地からみて、当該の牧は王権の馬を支える主要な牧であったろう。そして、そこでの馬の飼養を担当したのは倭馬飼を構成する室原馬飼氏であった。主として王権の馬利用を支えたのは職業部の馬飼であり、特定の氏族やそれ以外の部ではなかった。この当然の命題が本稿の結論である。ただ、従来の研究では、この点があまり意識されることはなく、平群氏や額田部が重視されてきたと思われる。上にも要約したように、平群氏や額田部が大和王権の馬を中心に、かつ継続的に支えたわけではなかった。改めてこの点を強調しておきたい。大和につ

いて、いくつかの場における馬飼集団の居住や牧の存在が予想されるが、具体的に説明していく必要があり⁽³²⁾、それを通して倭馬飼の全体像が明らかになっていくはずである。これは今後の課題としたい。

- (1) 井上光貞「部民の研究」(同著作集4『大化前代の国家と社会』(岩波書店 一九八五年) 初出一九四八年)
- (2) 平野邦雄「品部と雑戸」(同『大化前代社会組織の研究』(吉川弘文館 一九六九年) 初出一九六一年)
- (3) 『大日本古文书(編年文書)』二卷三二八ページの意。以下、このように略記する。
- (4) ほかに「癸卯三月一日記出雲国：室原□」(削屑三片 『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報』一九 三〇ページ上) というものもあるが、これは出雲国の室原であろう。『出雲国風土記』仁多郡に室原山・室原川の記載がある。『播磨国風土記』掛保郡に室原泊、讃容郡に室原山の記載がある。また、『万葉集』一一・二八三四番の歌にも「室原」とみえる。
- (5) 『日本歴史地名大系 奈良県の地名』・『古代地名大辞典』
- (6) 服部昌之『律令国家の歴史地理学的研究』大明堂 一九八三年
- (7) 岸俊男『額田部臣』と倭屯田」(同『日本古代文物の研究』(塙書房 一九八八年) 初出一九八五年)
- (8) 『天理市埋蔵文化財調査概報 昭和六三・平成元年度』天理市教育委員会 一九九〇年
- (9) 『笹鉾山古墳群』(田原本町埋蔵文化財調査概要一九) 田原本町教育委員会 二〇〇五年
- (10) 『下永東方遺跡』(奈良県文化財調査報告書八六) 奈良県立橿原考古学研究所 二〇〇一年
- (11) 森公章『額田部臣の研究』(『国立歴史民俗博物館研究報告』八八 二〇〇一年)
- (12) 笹川尚紀「平群氏の研究」(『人文知の新たな総合に向けて』第三回報

- 告書(下) 京都大学大学院文学研究科 二〇〇五年)
- (13) 鷲森浩幸「園の立地とその性格」(同『日本古代の王家・寺院と所領』塙書房 二〇〇一年)
- (14) 石上英一「官奴婢について」(『史学雑誌』八〇—一〇 一九七一年)
- (15) 平林章仁「蘇我氏と馬匹文化」(同『蘇我氏の研究』雄山閣 二〇一六年)
- (16) 田中卓「紀氏家牒」について」(『大化前代の枚圖』(同著作集2『日本国家の成立と諸氏族』(国書刊行会 一九八六年) 初出一九五七年・一九七六年)
- (17) 本位田菊士「河内馬飼部と倭馬飼部」(田村円澄先生古稀記念会編『東アジアと日本 歴史篇』吉川弘文館 一九八七年)
- (18) 加藤謙吉「平群地方の地域的特性と藤ノ木古墳」(同『大和王権と古代氏族』(吉川弘文館 一九九二年) 初出一九八九年)
- (19) 辰巳和弘「上宮王家と古代平群地域」(同『地域王権の古代学』(白水社 一九九四年) 初出一九七二年)
- (20) 森公章「額田部臣の研究」(注11)
- (21) 仁藤敦史「額田部臣の系譜と職掌」(同『古代王権と支配構造』(吉川弘文館 二〇一二年) 初出二〇〇一年)
- (22) 笹川尚紀「平群氏の研究」(注12)
- (23) 平林章仁「日向の駒は額田馬」(同『日の御子』の古代史』(塙書房 二〇一五年) 初出二〇一二年)、渡里恒信「上宮と厩戸」(『古代史の研究』一八 二〇一三年)
- (24) 概略は佐伯有清「馬の伝承と馬飼の成立」(同『古代史への道』(吉川弘文館 一九七五年) 初出一九七四年)
- (25) 『隋書』倭国伝にはこれに関して「又遣大礼哥多毘 從二百余騎郊勞」とあり、大礼哥多毘とは比羅夫のことと推定される。
- (26) 吉田晶「凡河内直氏と国造制」(同『日本古代国家成立史論』東京大学出版会 一九七三年)、狩野久「額田部連と鮑波評」(同『日本古代の国家と都城』(東京大学出版会 一九九〇年) 初出一九八四年) 岸俊男「額田部臣』と倭屯田」(注7)
- (27) 本位田菊士「額田部連・額田部について」(『続日本紀研究』二二三八 一九八五年)

- (28) 仁藤敦史「額田部氏の系譜と職掌」(注21)
- (29) 前田晴人「額田部連の系譜と職掌と本拠地」(同『古代王権と難波・河内の豪族』〈清文堂 二〇〇〇年〉 初出一九九一年、平林章仁「日向の駒は額田馬」(注23)
- (30) 渡里恒信「上宮と厩戸」(注23) も額田部と馬の飼養を結びつけた。
- (31) 佐伯有清「馬の伝承と馬飼の成立」(注24)
- (32) 鷺森「奈良時代の牧と馬の貢上」(『奈良学研究』一五 二〇一三年) で示した大倭国宇智郡の鼠(高)栗栖の牧はそれに該当すると考える。